R-18
成人向け
同人誌
18歳未満の
閲覧・購入禁止

ダークファンタジーBL小説

ダチュラの復活

Ysbadiladh

作
鶸音

illustration: 上月琴葉

目次

chapter 1　2

×1（1）……2
×1（2）……4
×1（3）……6
×1（4）……8

chapter 2　15

×2（1）……15
×2（2）……17
×2（3）……22
×2（4）……25
×2（4・5）……27
×2（5）……30

chapter 1
×1（1）

初めて人を手に掛けた僕に、『天使』は薄ら笑いを向けていた。
「……♪」
「……何さ」
孤児となった僕へのそれは、救いだったのだろうか。
神の遣いらしい白い装束にそれらしい『片翼』。しかしながら、あまりにもこちらを舐めて見下したような、ふさわしくない表情。
「いいよ、続けなよ。僕はその方が好きだから」
自暴自棄になって人に手を掛けている最中であった僕でも、一瞬手を放し、もう一人は逃げていく。これは、神の遣いの振る舞いではない。これだけは分かる。
「勿体ない、逃げちゃったね。さて、どうする？　成功しようがしまいが、キミは追われる身になっていたわけだけど」
「……いや、ちょっと待ってよ。全然理解が追いつかない」
頭がこんがらがっている僕に、『あはは、仕方ないなあ』と笑いながらその『天使』は説

明を始めた。

「だってさ、天界の上の方は悪い人を地獄行きにすることを考えてはいるけど、人間界で直接やってしまったほうが手っ取り早いじゃん？　ちょうど良かった、キミに任せたくてさ」

「嫌だ」

「駄目だよ、これはいま運命となったんだ。手始めに、暗殺をしてみようか」

僕の運命はあまりにも突然に、転落から破滅へと進むことになった。

×1（2）

僕が握っているナイフから、赤い液体が滴る。

「……な、何を」

「殺すなら、誰から見ても殺すべき奴を殺そうよ」

「……っ」

赤いラインの入った白い装束。そして、白い羽根。頭上に浮かぶリング。僕の目の前にいる「そいつ」は少なくとも人間では無い――いわば「天使」と呼ぶべき――存在には違いない。しかし、そいつが天使だとして、今したことを「英雄」だって？　翼とリングは確かに――片翼であることを除けば――天使のものなのに、理解しがたい言葉に僕は混乱し、怯えていた。

元々、そんなつもりは無かった。奪われたから、奪い返すためにナイフを盗んで必死に刺した。やらなきゃ、やられるのだから。正義とか罪とか、そんなものを考えるのは贅沢でしかないんだ。ただでさえ、突然放浪するしか無くなったというのに。

「大丈夫さ。僕がその地位は保証する。君は英雄として扱われるから」
「嫌だ。生きていられるだけでいい」
「英雄になれば、住むところも食べるところも、それに着るものにだって困らない。こんな簡単な話などないじゃないか。既に、君は一回成し遂げたのだから」

話が通じない。頭の中をぐるぐると思考が迷走する。
――どうする、どうする?!
雨の降る中、全く濡(ぬ)れていないそいつは、僕の頬(ほお)に手を添えた。

「もう、僕が決めたから。逃さないよ」

そう言って、「天使」は僕に不気味な笑みを浮かべた。